

オスマンの家産官僚制とティマール体制

鈴木 董

東京大学東洋文化研究所

1 イスラム帝国としてのオスマン帝国

オスマン帝国は、13世紀末、イスラム世界とビザンツ世界のせめぎ合うアナトリア西北部のフロンティアに出現し、まずアナトリアで、ついでバルカンへと着実に発展し、16世紀に入り、地中海世界の約4分の3を支配するに至り、1922年まで約6世紀半近くにわたって存続した。

この国家の原初の担い手は、トルコ系ムスリムであった。しかし、国家の統合の基軸は、民族よりむしろ宗教としてのイスラムに求められ、トルコ民族国家というよりは、むしろイスラム帝国というべき存在となっていた。

2 オスマン帝国についての二つのイメージ

このオスマン帝国の国家構造については、相異なる二つのイメージが成立している。ドイツの社会学者マックス・ウェーバーは、周知の如く、中国を典型的な家産官僚制国家としてとらえた。これに対し、ウェーバーは、オスマン帝国については、むしろ封建制的要素を重視した。彼の場合、オスマン帝国について、家産制的軍隊について、また宮廷の官職について、家産制的要素についても言及してはいるが、この国家の家産官僚制的国家としての側面についてふれるところは少ない。そして、オスマン帝国における官僚制化の面についてふれるときも、封建制的構造をもっている、事務量が増大するにつれてますます官僚制化する傾向を示したと論じた。ウェーバーにとって、オスマン帝国は、レーン制ならぬプフリュンデ封建制を根底とする国家のイメージが強かった。

このことは、オスマン史研究の当時の状況とともに、ウェーバーがオスマン帝国を扱うにあたって、ティッシェンドルフのトルコ封建制論を主材料としたことによるところが大きいであろう。

ウェーバーの影響を受けつつ、独自の比較国制史研究をなしたオットー・ヒンツェもまた、彼の封建制論において、ウェーバーのイメージを受け継ぎ、オスマン帝国の封建制について論じた。しかし、オスマン帝国史研究の歴史のなかでは、封建制的国家としてよりは家産官僚制的国家としてのオスマン国家のイメージが、遥かに根強いものとなっている。

このように、オスマン帝国の国家構造については、二つの相異なるイメージが、存在している。それでは、オスマン国家の実相は如何なるものであったか。この点について、原初より18世紀末に至る5世紀間の前近代のオスマン帝国につき、少し検討してみよう。

3 封建制的要素としてのティマール

オスマン国家の起源は、13世紀末におけるイスラム世界の西北の辺境、アナトリアの最西北端に現われたオスマンなる指導者に率いられたムスリム・トルコ系の集団に求められる。この集団は、原初、騎兵を中心とする集団であった。

オスマン帝国は、始祖伝説においては、中央アジアに起源をもつトルコ系遊牧民のオグズ族のカユ部族に求められる。そして、このオスマン帝国時代に成立した始祖伝説は、トルコ本国においてのみならず欧米における、近代史学においても、長らく定説となった。漸く戦間期に至り、ポール・ウィテックが、原初のオスマン集団の性格について、遊牧部族集団というよりも、むしろ既に部族的きずなを離れフロンティアで活動する戦利品獲得をもめざすイスラムの聖戦、ガザーをこととする戦士、すなわちガーズィーの集団であったとの説を提示した。この説は、現在のところ最有力の学説となっている。

原初のオスマン集団の性格がいかなるものであらうと、オスマン集団は、周囲のムスリム・トルコ系の諸君侯国とも争いつつ、他方でビザンツ帝国領の征服を進め、国家形成を進めていった。

その際、戦士たちの給養の方法としては、征服地を与えていく方法をとった。原初における戦士たちへの土地授与の詳しい実態は、14世紀についての同時代史料が乏しいこともあって、必ずしもつまびらかでない。しかし、少なくとも、14世紀末にかけて、戦士達に対する君主の統制も次第に強化され、征服地において検地（タフリル *tahrir*）が体系的に行われるようになっていった。15世紀後半成立のオスマン帝国の最初の年代記類においても、この時期について「書かれた（ヤズルドウ *yazıldı*）」との表現がしばしば見られるようになる。そして、15世紀初頭になると、同時代の検地帳（タフリル・デフテリ *tahrir defteri*）の現物が残され始める。こうして、原初以来のムスリム・トルコ系の戦士たちを最初の母体としつつ、その後、様々の要素が加わりつつ拡大した騎兵たちの給養の形態が確立していった。ティマール *timar* 制と呼ばれるこの給養形態こそ、オスマン帝国の封建制的要素というべきものであった。

ティマール制も、時代により姿を変えていったが、ここでは、その確立した形について、素描を試みることにしよう。

確立された形でのティマール制度において、年収税額で表示された課税対象は、原初、何よりも土地であったであろう。しかし、後には、土地以外の徴税対象も、ティマールの対象となった。ただ、やはり基本は土地にあるから、ここでは、土地への徴税権を対象としたティマールに対象を絞りみていくことにしよう。

ティマールを授与された者は、そのティマールの所在する地方に在住し、ティマールからの収入により生活し、かつ年収額に応じて規定された装備と補助軍勢力を養い、戦時に召集を受けて規定の装備と補助軍勢力を整えて軍役義務に従い従軍した。

その場、ティマールの対象となった土地は、国有であり、ティマール保有者は、あくまで徴税権のみを与えられた。下地は原則として国家に属し、納税者でもある、耕作者としての農民は、直接、国家と世襲の認められた永小作契約を結んだ。そして、彼らは、規定に従い、一定額の税をティマール保有者に支払った。

ティマール保持者は、下地に対していかなる支配権も有せず、また当然の権利としてのティマール保持者の地位の世襲権も、有していなかった。ただ、軍役に服しう男子のあるときは、事実上、世襲が認められた。但し、ティマールは、基本分と加増分からなり、事実上の相続にあたっては、基本分のみが対象となり、加増分は国庫に帰属した。ティマール授与は、オスマン帝国の君主たるスルタンの発するベラートberat（勅許状）をもって行われたが、ティマール保持者が死去したとき、相続にあたって新たな勅許状が与えられた。逆に、スルタンが没したときは、全ティマール保持者に対し、新スルタンの名の下に、勅許状が新たに賦与された。

ティマール保持者は、徴税対象者たる農民らに対しては、裁判権などは有しなかった。裁判は、原則としてイスラム法官（トルコ語でカドゥkadı、アラビア語のカーディーに由来）が行うこととなっていた。

ただ、ティマール保持者たちからなるティマール制騎兵軍の指揮系統は、同時に帝国の地方行政組織となっていた。帝国の国土は、サンジャク・ベイsancakbeyiの管轄するサンジャクsancak（トルコ語の原義は「旗」）に分かれていた。サンジャク・ベイは、古くは、ティマール制騎兵の小軍団の指揮官であり、小軍管区長官というべき存在であった。何人かのサンジャク・ベイの上には、ベイレルベイbeylerbeyiなる者がいた。ベイレルベイとは、ベイたちのベイ、すなわち武将たちの将を意味し、元来は、君主に次ぐ総司令官を意味し、王子がこの任につくのが例であったが、14世紀後半に性格が変じ、王子にかわって臣下が任ぜられるようになり、ティマール制騎兵の司令官、大軍管区長官というべきものとなり、さらに複数化していった。戦時には、自らの大軍管区内のサンジャク・ベイとその下にある騎兵たちを率いて従軍した。ベイレルベイ、サンジャク・ベイは、本来は軍職であったが、次第に地方行政官としての性格をおびるようになった。こうして、ベイレルベイとその軍管区であるベイレルベirikは総督と州、サンジャク・ベイとサンジャクは県知事と県というべきものとなっていた。

ただ、帝国の地方行政の真の根幹は、イスラム法官（カドゥ）とその管轄区でイスラム法官区とよぶべきカザkazaであり、空間的には、一つのサンジャク内にいくつかのカザが存在していたが、ベイレルベイ、サンジャク・ベイ系の地方行政系統とイスラム法官とは直接の指揮命令関係になく、イスラム法官は直接中央につらなり、両者は相互補完、相互監視関係にあった。

そして、ベイレルベイ、サンジャク・ベイ系列に属する地方在住のティマール制騎兵には裁判権はなく、平時には治安維持やイスラム法官の要請下に実力行使を伴う執行行為にたずさわるのみであった。

このように、オスマン帝国は、一方で封建制的要素の強い国家としてとらえられることがあったが、全体としてのその国制、国家構造は、少なくともレーン制的封建制に基く国家に見られるような分権的構造とは、対照的な、集権的構造を有していた。その集権度は、レーン制的封建制の概念を抽出する際の土台となった西欧キリスト教世界の諸国家でいえば、近世絶対王政時代に始めて達成された水準を、既に15世紀末から16世紀初頭において超えていたといえよう。

その意味では、オスマン帝国もまた、偉大なる中国史家、宮崎市定の提唱した「東洋的近世」

に、既に到達していたといえる。

それでは、このような集権化を可能としたものは何であったのか。このことを解明すべくオスマン帝国の国制、国家構造についてのいま一つのイメージとしての家産官僚制国家としての面について、検討を加えることとしよう。

4 家産官僚制化の進展

原初、オスマン家出身の指導者は、戦士たちの推戴によりその地位につき、指導者と戦士たちの関係は、君臣関係というよりは「仲間中の第一人者（プリムス・インテルパーレス）」と仲間たちとの関係に近いものがあつた。そして、オスマン集団は、オスマン家出身の指導者とその一族、そして有力戦士たちによって、相互協力の下で指導されていた。

しかし、征服の進展により支配領域が拡大していくにつれて、オスマン家出身の指導者は、次第に君主化し、さらに君主による集権化・専制化が進行し、この方向で新たな支配組織が形成されていった。それとともに、オスマン家出身の指導者と戦士たちとの関係も次第に君臣関係化し、イスラム世界に広く見られる君主の即位時における臣下の臣従の誓いとしてのバイアに僅かにかつての推戴の痕跡をとどめるにすぎなくなった。とりわけ15世紀後半、第七代メフメット二世のコンスタンティノポリス征服後は、それまで続いてきた君主と主だった臣下との公式の共食の慣例も廃され、君主の孤食化が進んでいた。これにつれて、君主の称号も、ベイbey、ガーズィーgaziからスルタンsultanへと変じていった。

君主による専制化・集権化と並行して、オスマン国家の場合、原初に見られたオスマン一族の共働もまたみられなくなり、第4代バヤズィット一世以降、父子相続制に従いつつ、即位した君主による兄弟殺しが慣例化し、有力な政治勢力としての王族の存在しない社会が出現した。

このような君主による専制化・集権化は、その方向における新たな支配組織形成によって組織的に基礎づけられていった。そして、新たな支配組織形成は、おおむねイスラム世界のなかでとりわけアッバース朝以降成立してきた組織モデルを、アナトリアにおける先行国家であるルーム・セルジューク朝や先進的諸君侯国を通じて継受しつつ進行した。

このような新たな支配組織形成の第一歩は、早くも初代オスマンの治世に、イスラム法官（カドゥ・アラビア語でカーディー）制度の導入という形で始つた。イスラム法官としては、イスラム法学の専門家としてのウラマーulema（アラビア語でウラマー）が任ぜられたが、当初、オスマン集団内にウレマーは存在しなかつたので、アナトリアの先進地域から招致する形で人員補充がなされた。そして、第2代オルハン時代に入り、オスマン領内にもイスラム学院（メドレセmedrese）（アラビア語でマドラサ）が初めて開設され、自前のウラマー向けの人材の養成が始つた。

イスラム法官は、主としてイスラム法（シャリーア）に基く裁判にあたるとともに、地方行政の末端として主要な民政にもあたつた。イスラム法官制度の導入は、オスマン朝の君主が支配領域内においてイスラム法というイスラム世界全域における世界法に基く一元的裁判権を把握したことを意味し、またその民政機能は、支配領域内における君主の一元的徴税権・物資人員動員権を支えることとなつた。中世の西欧キリスト教世界においては、法秩序は重層的であ

り、社会は社会諸階層の特権のバランスの体系であり、王はその王国における一円的裁判権も一円的徴税権も有さなかった。この点からしても、オスマン国家は、いかに封建制的側面を有していようと、中世西欧のそれとは非常に異なる国制を有していたといえる。

初代オスマンによるイスラム法官制度導入は、空間的に集権化を進め君主の一円支配を貫徹していくための最大のことであったが、第2代オルハン時代には、君主の補佐者として宰相（ヴェズィール *vezir*）制度が導入され、これは権力ヒエラルキーにおける君主の専制化の最大の基礎となった。宰相制度は、アッバース朝で成立し広くイスラム世界の諸王朝に継受されたものであった。原初、オスマン朝の宰相は、非軍事的な民政面での君主の補佐者とされ、これまたオスマン集団外から招かれたイスラム法学者が起用された。その後、オスマン国家の領域が、かつてのビザンツ帝国の東半であったアナトリア（トルコ名アナドル *Anadolu*）のみならず、西半であったバルカン（ルメリ *Rumeli*）へと広がった第3代ムラト一世の時代に、宰相は、民政上の権能のみならず軍事上の権能も与えられ、また従来は一名であったものが複数化し、第一宰相は、大宰相（ヴェズィーリ・アーザム *vezir-i âzam*、ヴェズィラザム *vezirazam*）と呼ばれ、次第に君主の「絶対的代理人」として支配組織の実質的要となっていく。

ムラト一世の時代、オスマン朝の支配領域内の主要都市に順次任命されていったイスラム法官（カドゥ）のヒエラルキー的組織としての編成も進められ、その頂点として、支配者身分としてのアスケリ *askeri* 身分所属者の裁判と相続等に主としてかわるカザスケル *kazasker*（カーディ・アスケル *kadı-ı asker*）（軍人の法官）職が創設され、これが全イスラム法官の長としてイスラム法官全体の指揮監督・任免の権が与えられた。

オスマン国家における君主による中央集権的・君主専制的な新たな支配組織形成の努力は、行政・司法のみならず軍事にも及んでいった。原初以来、オスマン朝の軍制の中心は騎兵にあり、原初のオスマン集団以来の戦士たちに加え、征服された同じくムスリム・トルコ系の諸君侯国の軍人たちに加えて、しばしば同じく征服された旧ビザンツ系の軍勢力もこれに加えられて拡大していった。

この騎兵たちは、オスマン家の指導者自身により指揮されたが、ときにベイレルベイの称号を帯びた者によって指揮された。この頃のベイレルベイは、総司令官というべきものであり、王子がこの任にあたってきた。しかし、ムラト一世の時に、ベイレルベイに初めて臣下からララ・シャーヒンが任ぜられた。これは、騎兵たちの指揮命令系統の制度化への一歩であった。そしてまた、14世紀末以降、前述したように、騎兵たちの給養のシステムもまた、ティマール制へと次第に制度化され、統制も強化されていった。

これに加えて、既に第2代オルハンの時代に、君主直属の常備軍形成の試みが始まった。オルハン時代には歩兵のヤヤと騎兵のミュセッレムが創設されたが、主に徴募制によっており大きな成功をみなかった。しかし、ムラト一世時代には、歩兵のイエニチェリ *yenicheri* が本格的に組織化され、従来の騎兵たちへのカウンター・バランスとなるとともに戦場にあつては連携して相互補完的役割を果たすようになった。そして、このイエニチェリは、君主直属の奴隷出身者から構成されたが、奴隷軍人の使用は、古くアッバース朝期に確立し、イスラム世界に特徴的な家産制的軍隊の形成方法となった。マムルーク、グラームなどと呼ばれる奴隷軍人のオス

マン版というべきイエニチェリは、原則として、現金の俸給により給養された。マムルーク制度のオスマン版というべき、この奴隷軍人としては、歩兵のイエニチェリに加え、後にその補助部隊である砲兵、砲車兵など、さらに騎兵も加わり、全体としてカプクル軍団kapıkulu ocaklarıと呼ばれるものへと発展していった。

イエニチェリの人員補充は、当初、戦利品としての戦争捕虜に対する君主のイスラム法上の5分の1の取分に基くペンチック・オウラスpençik oğlanı制度に基づいていたが、14世紀末までには、オスマン領内のキリスト教徒臣民の子弟中、十代の少年を強制徴集し君主の奴隷化しイスラムに改宗させて用いるデヴシルメ（少年徴集制度）によることとなった。イスラム世界における奴隷軍人の人員補充の方法として極めて例外的なこのデヴシルメ制度の創出によって、オスマン朝の君主は、その常備軍のために等質の人材を恒常的に補充することが可能となり、君主直属の家産制的軍隊は、確たる基礎を得た。

なお、オスマン朝では、デヴシルメによって得た少年たちのうち、最優秀部分を、宮廷（サライsaray）に小姓（イチュ・オウラスıç oğlanı）として採用するのが例となっていた。小姓たちは、宮廷のなかで君主の私生活の場の部分において、女性のための居所としての後宮（ハレムharem）に対し、男性のための居住としての内廷（エンデルンenderun）で君主に奉仕しつつ、文武の訓練を受け、君主子飼いの将来のオスマン帝国の幹部要員として、15世紀後半以降、大きな意味をもつこととなった。

14世紀末、第3代ムラト一世時代に、確たる形をとり始めたオスマン帝国の君主専制的・中央集権的な支配組織とその担い手としての支配エリートの発展は、1453年、第七代メフメット二世が、コンスタンティノポリスを征服してビザンツ帝国を滅ぼし、ビザンツ一千年の帝都を自らの都として以降、新しい段階に入った。

メフメット二世は、初期以来、大宰相、宰相を輩出したウレマー系の名門、チャダルルçandarlı家出身の大宰相ハリル・パシヤHalil Paşaを処刑した。その後、大宰相・宰相には、ウレマー系の人物より、むしろ君主子飼いのデヴシルメ系の宮廷奴隷出身者が任用されることがふえていった。この傾向は、16世紀前半に確たるものとなり、さらに宮廷奴隷出身者は、地方におけるベイレルベイ（総督）、サンジャク・ベイ（知事）の職にも進出していった。

メフメット二世の時代には、またイエニチェリへの火砲の装備が進み、大砲からさらに小銃へと移っていったとみられる。

支配組織の文民的部分においても、文書行政と財政の組織が次第に構造分化をとげていった。と同時に、なお当初はウレマー系の人々が主要な担い手ではあったが、世俗的な純粋の実務官僚としてのキャーティブkâtip（書記）が進出し始めた。

このような方向でのオスマン帝国の支配組織の発展は、16世紀に入り、メフメット二世の曾孫にあたる第10代スレイマン一世（Süleyman）の時代に確たる段階に達した。邦人が大帝、西欧人が「壯麗者 The Magnificent, Il Manifico」と呼び、オスマン人が制度典章が整ったために「立法者（カヌーニーKanunî）」と呼ぶスレイマンの時代に、オスマン国家の帝国体制が確立した。と同時に、オスマン国家の家産官僚制国家としての側面が、非常に強まっていった。

5 オスマン家産官僚制の変容

オスマン帝国の支配組織の担い手は、同時代のオスマン人士によって、「剣の人（エフリ・セイフehl-i seyf）」と「筆の人（エフリ・カレムehl-i kalemler）」の二つの柱から成りたっているものとしてとらえられた。これは、現実とも照応しており、実態としては、「剣の人」はさらにティマール制の在地騎兵とカプクル軍団員、「筆の人」はウレマー（イスラム法学者）とキヤーティプ（書記）からなっていた。

このように、オスマン帝国の支配層は、相異なる四つの社会層からなり、これら四社会層は、上下秩序関係にあるのではなく、並立して支配組織内の機能を分担するものとして、とらえられていた。ただ、現実には、これら四社会層は時間の経過の中で出現し、四社会層の間の力関係と支配組織内での重要性もまた、時間の経過とともに変化していった。そして、この変動はまた、オスマン帝国における封建制的要素と家産官僚制的要素の関係の変化にかかわっていた。

オスマン帝国における封建制的要素というべきティマール制騎兵は、初期以来、一六世紀初頭までオスマン帝国の軍事力の中心であり、その給養形態としてのティマール制は、帝国の軍事、税制、土地制度の骨格をなした。しかし、16世紀後半から、この状況に変化が生じ始め、古典的なティマール制は変容し始めた。

ティマール制の変容を中心とする変化を、同時代のオスマン人士は、古き良き制度の墮落、悪しき新たなものの出現とみ、オスマン国家の衰退のもととなりうるものとしてとらえた。そして、近代のオスマン史研究者たちも、長らくオスマン朝人士の衰退・没落観を受け継ぎ、これを前提として16世紀末以降のオスマン帝国の歴史をとらえがちであった。このため、衰退期と目された17、18世紀史の研究は当閑に付され、原初から16世紀中葉までの古典期と、19世紀初頭以降の改革期に焦点があてられがちであった。しかし、このような見方が正鵠を得たものかどうかについては、再考を要する。

確かに、オスマン帝国では、16世紀後半よりティマール地を徴税請負地としていく動きが加速化していった。そして、徴税方法の変化により、様々の不都合も生じ、16世紀末から17世紀初頭にかけての一連の民衆反乱の重要な一因となったのも確かであろう。

しかし、この徴税方法の変化の大きな原因の一つは、軍隊の俸給用の財源の拡大の必要性にあったと見られる。そして、その背後には、火炮の重要化による歩兵イエニチェリを中心とする常備軍の拡大の動きがあったと考えられる。とすれば、ティマール地から徴税請負地への動きは、単なる古典体制の解体というより、軍事技術の急速な革新としての軍事革命に対する、オスマン側の環境適応の努力の結果であったともいえる。そして、ティマール制騎兵から常備軍団への軍事的重点の移動は、封建的要素に対し家産制的要素がより強まっていくことを意味していた。

オスマン帝国没落観のいま一つの論点は、第10代スレイマン一世の没後、無能な君主が続いたという点であった。確かに、初代から第10代までのオスマン朝の君主は、ほぼすべて有能な君主であったのに対し、第11代セリム二世以降は、有能ならざる君主が多いといえる。ただ、この事態の背景にもまた、単なる個人の資質の問題のみでなく、オスマン帝国の支配組

組織の発展とそこにおける君主の役割の変化があった。

オスマン帝国の支配組織は、スレイマンの時代に一つの新しい段階に達した。そこでは、もはやイスラム世界における先進的組織モデルの受容による組織形成の過程はほぼ飽和点に達し、オスマン朝独自の維持発展が弱まり、組織内における構造と機能の分化が進行し始めていた。この流れの中で、16世紀後半より、「スルタンの絶対的代理人」としての大宰相（ヴェズィラザム *vezirazam*）の役割が拡大し、君主自体の役割は後退していった。そして、1654年には、大宰相が宮廷から離れて、イスタンブル市中に独自の官衙をもつに至った。そして、大宰相の官衙としての「大宰相府（バーブ・アサーフィー *bab-ı asafi*, バーブ・アリー *bab-ı ali*）」の役割は、その後ますます増大し、19世紀に入るとオスマン政府そのものを意味するに至った。このような流れは、同じく17世紀中葉に生じた財務長官府（バーブ・デフテリー *bab-ı defteri*）の宮廷からの独立にも現れている。

そこに見られる流れは、君主個人と宮廷に負うところの大きい、より家産制的なシステムから、支配組織のルーティンとして政務を遂行していくより官僚制的なシステムへの移行の流れであった。実際、17世紀後半に入ると、支配エリートの構成において、純粋の世俗の実務官僚としてのキャーティプ（書記）層出身者の進出が見られ始まる。この動きは、まず財務官僚出身のパシャの増大として現われる。そして、18世紀初頭以降になると、大宰相府の役割がますます大きくなっていったこととも連動して、大宰相府内で昇進を重ねてきた文書官僚の台頭が著しくなる。とりわけ、大宰相府の文書官僚の監督者である「書記官長（レイス・ウル・キューターブ *reis ül-küttab*）出身の大宰相が数多く現われるようになっていく。そして、この傾向は、18世紀末へとかけて、より顕著となっていく。

それとほぼ並行して、組織の構造分化もさらに進行し、18世紀には、16世紀の支配組織とは非常に異なる組織構造、政策決定過程を有するようになっていった。ここに見られる流れは、いわば官僚制化の流れであった。

書記層の台頭とは対照的な動きが、宮廷出身者に見られた。16世紀は、スルタン子飼いの宮廷奴隸のヘゲモニーの時代であった。しかし、17世紀に入ると、一方で、宮廷のエリート要員である小姓（イチュ・オウラヌ）の性格が変わり始め、デヴシルメ系の宮廷奴隸のみでなくムスリムの子弟が混入し始めた。と同時に、宮廷の小姓出身者の支配エリート最上層部に占めるシェアが逡減し始めた。そして、18世紀に入ると、奴隸出身であると自由人出身であるを問わず宮廷出身のトップ・エリートは激減するに至った。ここにもまた、少なくとも、君主の家を拠り所とするオスマン朝における古典的な家産制的要素の後退が顕著に見られるといえよう。それは、実務官僚の台頭という官僚制化の超勢と並行して進行していた。

ただここで、17世紀から18世紀にかけて、君主の家を中心とする家産制的傾向とは少し異なる新たな別のタイプの家産制的要素も顕著となり始めていたことに言及しておく必要がある。それは、大官の「家」の役割の増大と大官の「家」に奉仕した人々の公式の支配組織への進出と組織内での台頭である。その一つの象徴は、従来、大宰相個人の家の差配であった「大宰相用人（サダーレット・ケトヒュダス *sadaret kethüdası*）」が公的官僚となり、大宰相府内における実務官僚の首位の地位を占めたことであろう。そこには、宮廷からの分離の進行

にみられた傾向とは相い反する新たな家産制化patrimonializationの流れが現われている。

この新たな「家産制化」現象は、オスマン帝国の支配組織の拡大とその役割の増大のなかで、当時の財源と人的資源では対応しきれぬ部分も拡大し、公式組織formal organizationの機能を補完するものとして、非公式informalな大官の「家（カプkapı）」の役割が増大したため生じたとみるべきであろう。

13世紀末から18世紀末に至る前近代のオスマン帝国の5世紀間のオスマン帝国の国制、そして支配組織の発展過程の中で、長期のトレンドとしては、封建制的要素に対する家産制的要素の優位化が進行し、さらに君主とその家に依拠する家産制的要素に対する官僚制的要素の顕著化が進行していった。そして、18世紀には、16世紀のそれとは全く異なる、国制、支配組織を有するに至っていた。ただ、18世紀においても、大宰相府出身の文書官僚の進出という官僚制化のトレンドとともに、大官の「家」の役割の増大という新たな家産制化のトレンドが、相互補完しつつ並行して進行していた。

しかし、そのなかで、最も支配的なトレンドは、「官僚制化」のトレンドであった。そして、この中で蓄積された組織技術organizational technologyと、この中で生み出された大宰相府出身の文書官僚を中核とする高度の組織技術を有するマン・パワーこそが、18世紀から19世紀にかけて、「西洋の衝撃」の下で、近代西欧からモデルを導入しつつ、西欧の脅威に対抗し自己の存立を保とうとする「西洋化Westanization」による改革の最大の受け皿となったのであった。

[Abstract]

Ottoman Patrimonial Bureaucracy and *Timar* System

SUZUKI Tadashi

Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo

Two images cause complication concerning the state structure of the Ottoman Empire. One of these images attaches much importance to the feudal element, while the other emphasizes the element of the patrimonial bureaucracy.

The essential feudal element in the former is called the *timar* system. The roots of the Ottoman State are looked for in the Muslim-Turkish group that appeared in Anatolia in the 13th century. These groups were centered on mounted warriors *gazi* whose purpose was the holy war, *gaza*.

This group adopted method of distribution of the conquered lands as the allowance of the warriors. Later on systematic land surveys (*tahrir*) started, and the system called *timar* in which the sovereign distributed allowances to each warrior in line with the land survey records, known as *tahrir defteri*, was established.

In contrast with this development, the patrimonial bureaucratic nature of the Ottoman State intensifies with the establishment of the members of the Ottoman family as the sovereigns, centralization of power in their hands, and systematization of their rule. The Ottoman ruler, in the early stages was a first among the equals-*primus inter pares*. As they secured the title of sultan, however, they started to reign as despots, and only then the patrimonial bureaucracy with its allegiance to the will and orders of the Sultan was established as an organization in order to accomplish their rule and administration.

Thus, the *timar* system as the military organization of the mounted soldiers, and the patrimonial bureaucratic system existed together in the Ottoman State for a while, yet from the second half of the sixteenth century onwards, significant changes took place in the military system. The mounted soldiers under the *timar* system started to lose their military function, and gradually deprived of their *timar*. Those *timar* lands were given to tax collectors in their respective regions. This, however, was not a result of the corruption of the mounted soldier group, but rather was a renection of the developments that pushed for larger regular armies with foot soldiers at the center, as firearms gained importance. Hence, it should be understood as the Ottoman response that best fitted to the military revolutions in its environment.